テンプレ通りにアニポケ世界に転生！

クルル1212

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様に殺された?変わりに好きな世界転生させてくれるの!?

『アニポケ世界に転生のサトシの弟として生まれさせてください！』

やっぱりこれしかねえよなあ!!

※注意※

何番煎じか分かりませんがこの作品は『サトシ弟』という設定の転生者がサトシを強化しようとしたり多種多様なヒロインとくっつけようとしたりするお話です！（セレナというヒロインがいますが修羅場を求めるためｗ）

オリ主ＴＵＥＥはしたくないのですが強化やイベント状する場合もございます。ご了承ください。
世界線はアニポケ。ポケモンどんどん増えていくパターンですが既に各地方の各ポケモンたちや特性は存在しており研究者たちが探しまくっている状態です。
３０００文字前後でサクサク進められればなと思います。末永く見守ってください！

目次

プロローグ編
第1話：兄ではなく弟 ―――― 1
第2話：サトシとピカチュウ。そしてカケル！ ―――― 7
第3話：らりるれロケット団！ 15
第4話：トキワの森は迷いの森 21
第5話：転生者の葛藤 ―――― 31
カントー地方：キミに決めた！編
第6話：新たなる旅立ち！テンセイ山に向かって!! ―――― 39
第7話：ジムリーダーの宿命 ―――― 47
第8話：カケルの戦い ―――― 58

プロローグ編
第１話：兄ではなく弟

「遅刻だあああああああああああ!!!!!」
　天井、というより２段ベットの上からドタバタ騒いでおり俺があくびをしながら体を起こすタイミングで自分の寝ているベットの横にドスン、と物が落ちてくる。いや、物ではなくそれは人でこの世界の主人公【サトシ】であり我が兄であった。
　そんな兄が右往左往しながら目覚まし時計を持って自分に向かって問いかけた。
「なんで起こしてくれなかったあああ!!!」
「起こしたさ。そしたら俺のこと何度も蹴ったじゃん。ママも呆れてたよ?」
　と、俺の真っ赤に腫れた顔を見せる。アニキはすまんと素直に謝ったからいいとしよう。しかし【原作の修正力】ってすごいですね。目覚まし１０個仕掛けても壊して起こしにくる人を蹴り倒しても起きようとしなかったんだから。
「って、ヤバイ!このままじゃポケモンもらえなくなる!!!」
　パジャマ姿のまま【原作通り】にオーキド研究所へと向かって行く。
（やっぱりサトシはピカチュウを貰う運命なんだな。まあ、そのほうが原作知ってるほ

うからしたらありがたいんだけど。顔がマジで痛い。）

兄、サトシに蹴られた頬を摩りながらパジャマから私服に着替えると階段下へと降りていく。そしてリビングへ向かいキッチンで料理を作っているサトシのママ、そして【今世】のママでもあるハナコさんに声をかけた。

「兄さん、ようやく研究所行ったよ。あと湿布ない？蹴られたとこ少し痛むんだよね。」

「あらそうなの!?大変！今準備するから待っててね!?カケル！」

料理を作るのを中断するとドタバタとハナコさんは救急箱をとりにリビングから出て行く。俺はリビングの近くにあった鏡を見る。するとそこにはサトシに瓜二つ、というより【レッツゴーピカチュウ、イーブイ】に出て来た主人公君の容姿にそっくりだった。

アニメ　ポケットモンスターとは？

ポケモンマスターを目指す少年・サトシと、相棒のピカチュウをはじめとしたポケモンの成長を描いた物語である。

自分は前世、このアニメが大好きで小学生の頃から一度もアニメを見逃したことがな

い。仮に見逃したことがあっても録画をしておき何度も見るということするというガチマニアだ。

なぜそんな俺がこのアニポケ世界。それも主人公サトシの弟として、あのカワイイ系人妻、ハナコさんの家族になっているのかというと理由がある。

・・・まあテンプレ通りなんだけどさ。神様に殺されちゃいました♪畜生！せっかく社畜をやって給料貯めてきたっていうのに！金返せや!!っていいながら殺りかかりそうになると

「わ、分かった！お主が好きなポケモン世界に転生させてやる！それと金に困らないようにも特典能力とかつけてやる!!!」

殺りかかりそうになった手を俺はゆっくりと手を解き神様と握手した。世界はラブアンドピース！等価交換ってはっきり分かるんだね！

そんなわけで俺は神様から特典能力（人並み以上の金運）を貰い転生をさせて貰いましたとさ。

そして０歳児スタートでミルクプレイから始まり今日まで死なずに生きてこれましたとさ。

「よし、これで平気ね！けどサトシと本当に旅をしないの？博士もトレーナーになるなら一緒に冒険したほうがいいって言ってたわよ？」

ハナコさんことママは右手をサトシこと兄さんに蹴られた右頬を撫でて異体の痛いの飛んでけをしていてくれた。

それに加えて俺も将来はトレーナーになりたいと博士にコネを作り勉強やらさせて貰ってたので旅に同行するなら色々と手続きするが？と提案を受けていたが俺は断った。

一応旅に加わるタイミングも考えてるし？それにせっかくハナコママと２人な生活が味わえるんだし？ふっ、博士にはＮＴＲさせんぞ!???

「んー、一緒に旅すると兄さんの使うポケモンや戦術分かっちゃうし？やっぱ冒険は自分でしたいからさ！それにママのこと一人占め出来るし？」

「あら♪じゃあ今日から一緒に寝ましょうね♪サトシは全然甘えてくれないから寂しいのよ～」

と、２つの桃・・・いや、メロンがあるお胸さんに抱きつく。ああ～、ここに桃源郷はあったんじゃ～。そして、今日からひとつ同じベットで寝れることが確定。やったぜ！これで俺のポケモンマスターへの道、完!!!

「プルルルルッ、プルルルルッ」

「あー、はいはい！ちょっとまってね～」
そういいながら頭を撫でてくれていたハナコさんは抱き離れると電話が鳴り始めていたのでそれをとりに行く。くそ！誰だよ!!こんな朝っぱらから電話してくるのはよう!!!!
「久しぶり!!サトシ？今ちょうど博士にポケモンもらいに行ったわよ？カケルならいるわよ？ちょっと待ってね？カケル！セレナちゃんからよ！」
ｏｈ・・・まさかの電話相手はサトシ君ラブなヒロインことセレナちゃんで初めて俺がこの世界に来て原作ブレイクした相手だった。

セレナ。ＸＹで登場したまさかのサトシの正妻！最初はなんでこんなに惚れてるの？ご都合展開かよこのやろう!!!と思ってたんだけど違ったんだよね。
原作同様ポケモンサマーキャンプがあったので俺もそのキャンプに参加した。ちなみにライバルでおなじみのシゲルも一緒だ。
その際にサトシとセレナが原作通りに仲良くなっていたがシゲルや男どもがセレナにちょっかいを出していたがサトシがそれを身を訂して守っていたのですごいなーと思いながらサトシと同じくセレナをかばった。

そして、セレナが元の地方に帰ろうとしたさいに電話番号や住所交換しとく?と提案してサトシもセレナも二つ返事でＯＫをだした。その結果が

「それでカケル湿布張ってるのね?大丈夫?」

「大丈夫なら張らないよ!まったく早く俺の【義姉さん】になって楽させてよね?」

「義姉さんだなんて／／／ま、まだ早いわよ、バカ!!」ガチャリ

と、セレナは顔を真っ赤にしながら電話を切ってしまった。ちなみに２人はある程度意識をしているのか２人で話している時はハートマークを作り二人の世界を作っている。ふふっ、これはもう少しでゴールインかな?けどまさか原作ブレイクできるとは思わなかったな。だから、原作ブレイクできるかな?と思ってピカチュウ以外のポケモンを持たせて見ようと目覚まし多数や自分が直接起こしに行くといったことをしたんだけどある程度の修正力は入る見たいですね。

ともあれ。こんなわけで俺の生活してきた【９才】という年月はセレナとサトシを結びつける。ということからスタートすることになりそれが今後、物語にどう影響するのかワクワクしまくりながらおいしい朝食を味わいにリビングへと戻るのであった。

第２話：サトシとピカチュウ。そしてカケル!

セレナと電話を終えた後、ハナコさんの料理を今日も味わった後サトシに荷物を渡すために一緒に準備をした。

そして、原作同様なぜこんなに入ったと言わんばかりの量をバックに詰め込むと手をハナコさんに手を繋がれ一緒にオーキド研究所へと行く。

その際、マサラの住人たちから今日も仲良いねえ!とかからかわれたもんだから「ママと結婚するんだ!」とか「誰にも渡さないもんね!」とか塩を振りまくった。言ってて恥ずかしかったけどハナコさんがすげーうれしそうに抱っこしてくれてたしよしとするか!

そんな中ようやくオーキド研究所の前へと付くと・・・あれ?原作だとサトシ応援団とかシゲル応援団がいて２人を応援してくんじゃないっけ?けど、玄関先には誰もいなくて鉄格子の玄関?がギーコギーコと鳴っているだけだった。

「さあ、サトシが待ってるから早く行きましょうか!」

「う、うん!」

俺は困惑していたのかいつの間にか脚を止めて周りをキョロキョロしていたがハナ

コさんに声をかけられて長い階段を上っていく。
バチバチバチバチ!!!!
「キャ???な、なによ急に?雷?」
ハナコさんのびびった姿かわいい!・・・じゃねえや。突如オーキド庭園から電撃がすさまじい勢いで落ちた。いや、落ちたというよりあれはポケモンの技だ。もしかして!?
俺はハナコさんの手を振りほどくとダッシュでその雷のあった場所へと向かって行く。研究所内にいる人に挨拶をした後博士のいる場所は?と聞くとなにやらバトルの審判をしているのだとか?
その場所へ案内してもらうと中央でこの世界でおなじみのオーキド博士、ゼニガメを使い指示を出している紫色の服を着ているサトシのライバルになるシゲル。そして・・・
「ピカチュウ!でんきショ「「あっめえな!ゼニガメ、たいあたり!」」
サトシが操っているポケモンは原作通りにピカチュウなのだがすでに言うことを聞いていた。しかし、シゲルのトレーナーとしての指示力が高いのか相性が悪いにも関わらずゼニガメを使いピカチュウを倒してしまう。
「ピカチュウ、戦闘不能。この勝負シゲルとゼニガメの勝ち!」
「やっりい♪やっぱ俺って天才だわ。サトシ、お前もう旅しなくていいわ、俺一人で十

分ってね!じゃあ、じいちゃん俺もう旅に出るから。バイビーバイビー!」
　そういいながら俺のほうに向かってくるシゲル。俺の存在に気がついたシゲルは俺に気がついたのか近づいてきて
「おめえのアニキすっげえ弱いぜ?お前もきっとトレーナーの才能ないから早めに諦めたほうがいいかもな!ハハッ!」
　と、一言だけ言うとそのまま旅に出てしまう。サトシはというとピカチュウを抱きかかえながら傷薬を与えてゴメン。と何度も誤っているようにも見えた。博士になにがあったのかと聞くために俺はサトシの近くにいる博士に声をかけた。
「おお、カケルか。実はのう。いつもの言い争いになっての?バトルで決着をつけたらどうじゃと提案した結果がこれなんじゃよ。」
「なぜ兄さんはピカチュウを?御三家・・・初心者用ポケモンもらえるはずでは?」
「うむ。そのはずで準備はしておったのじゃがあのピカチュウがえらくサトシのことを気に入っての?サトシもこいつにするといってな?」
　んん?原作とだいぶ違うぞ????原作だとピカチュウの好感度は０だったはずだしシゲルともバトルはしないはず。それに御三家を準備していた?あかん。原作ブレイクの影響がここにでたのか?けど、ピカチュウが最初からなついてたってのは気になるけど・・・とりあえず励まさないといけないよな。弟として。

「兄さんハデに負けたみたいだね。シゲルに。」
「・・・ああ。全力で戦ったんだけどさ。完膚なきまでに。俺才能ないのかな?」
そういうサトシはアニメで見たことがないほど落ち込んでいる。サトシ自身本気で戦ったのに負けた。俺を選んでくれたピカチュウの才能引き出せずに負けた。など等ネガティブな発言ばっかりしていた。なのでサトシなら立ち直れると思いキビしめの言葉をかけた。
「才能あるかないかなんてしらないよ。男ならやるかやらないかの2択でしょ?それにピカチュウもリベンジに燃えてるみたいだし?な?」
「そうなのか?ピカチュウ?」
「ピ、カア!!!」
ピカチュウがその言葉にうなずくとサトシも決意を固めたのかほっぺたをたたく。
「・・・そうだよな!何回負けても最後に勝てばいいんだ!それに勝ち負けだけがポケモンバトルじゃない!」
さすが主人公だね!もう完全に立ち直ったじゃん!けど、今はピカチュウを回復させるのが先だろ?
「そ、そうだった!博士、回復装置貸してください!」
「ええじゃろう。ついてきなさい。」

そういうと俺たちは戦いのキズを癒すために研究所内へと向かう。そして、その時博士からとんでもない事を言い始めた。
「そうじゃ!初心者用ポケモン余ってるしカケルも旅にでんか?特例でワシが色々と手はずしておいたぞ?」
・・・はいいいいいいいいいい!???
「ほう?ヒトカゲにするのか?そいつは育てがいのあるポケモンじゃぞ!」
やったー!カケルはヒトカゲを手に入れたぞ!
ヒトカゲにニックネームをつけますか?
はい
↓いいえ
じゃねえよ!なに俺!?原作ブレイクもいい所だろ!!９才でポケモントレーナー!?いや、うれしいけどさ!博士にコネすりまくってよかったと思ってるけどさ!原作的にいいのこれ!?
「本来ならまずいんじゃがな?研究職員としてポケモンを持たせるのはありなんじゃ!ただ、ジム戦が出来ないというデメリットがあるがのう?」
そういいながらヒトカゲの入ったボールと図鑑が博士から手渡たされた。

ちなみにヒトカゲを選んだ理由？決まってんじゃん！リザードンかっこいいからだよ!!!転生者として当然の選択だろう!!それに兄弟でリザードン使いとか燃えるね！

「はい！これ、カケルの旅のカバン一式ね？実は博士から聞いてて準備してたのよ。がんばってらっしゃい？」

「カケルと旅に出れるんだな!?くーっ！ワクワクが止まらないぜ！」

「ピカ!!」

と、ハナコさんはマウストゥマウスのキスをしてサトシにもしようとしてるが恥ずかしくて遠慮しているようだった。てか、サトシよお。俺が一緒に旅するの確定なんだね？ピカチュウもめっちゃ張り切ってるし？うれしいんだけど。マジでどうするよ？

そんなこんなで兄はアニメでおなじみの服装になると俺とともにマサラタウンから旅に出る。色々原作ブレイクがどうのこうの考えちったけどやっぱ旅にでるってワクワクが止まらないよね！ちなみに原作同様ピカチュウはボールに入るのが苦手らしいので俺もヒトカゲをだし散歩がてらピカチュウと仲良くしているみたいだ。

「ピッカ、ピカチュー♪」「カゲカ～」

「二匹とも楽しそうだな！そういえばカケルは片っ端からポケモンゲットしていくのか？」

「いーや。そこは考えてないかな。なるがままにって感じ？必要とあれば捕まえるしな

ついてくれるポケモンしたらそのまま連れて行くってかんじかな?」
原作サトシのようなポケモンゲットにあこがれていた俺はあまりバトルでゲットはしない方針にしていた。なるべくなら友情ゲット!それと固体値だっけ?６Ｖだっけ?そんなポケモンいたらバトルとかで捕まえたいけどね?
「へー、じゃあ俺はさっそくゲットしちゃおうかな・・・よし!あいつだ!!ピカチュウ、いけるな?」
「ピ?ピッカア!!!」
サトシの声に反応してピカチュウは草むらの前にでる。がさごそと何かが動いているのでそれに向かってサトシはピカチュウにでんきショックを指示した。そして見事に命中したらしくそのポケモンの声が辺り一面にこだまする。
「クワアアアアアアア!!!!」
「おお!オニスズメじゃん!初ゲットはお前だ、いけ!モンスタ・・・」
「クワ!」「クワアアアア」「クワワワ!!!」
あ、これこの先の展開知ってるよお?（シロメ
オニスズメは仲間を呼んだ!遠くの森から何匹ものオニスズメの大群がこちらに向かいやってくる。つまり、これはですね!
「にーげるんだよおおおおおおおおおお!!!!」

「カゲカ！」
「ずりーぞカケル!!一人で逃げるなんて!!!」
「チャ～!!!!」
やはりオニスズメ先輩たちには勝てないってことなんですねえ？

第３話：らりるれロケット団!

「すごいじゃない!パパやグランパ、トキワシティまで何日もかかったって言うのに。それを経った1日以内で!それはともかく二人ともなにがあったの?すごいボロボロになってるけど大丈夫?」
「兄さんのせいでひどい目に・・・もうお家帰りたい。」
「本当にごめん。」
　現在いる場所はトキワシティ、ポケモンセンター。オニスズメの大群をやっつけながらなんとかトキワまで逃げ切った俺たち兄弟はポケモンを回復させながらハナコさんに連絡していた。ああ～パジャマ姿・・・というかバスローブエロいんじゃ～。その服がばっと広げて!がばっと!!!
「お待たせしました!お預かりしたポケモンは元気になりましたよ!」
「ピカア!」「リザっ!」
　ジョーイさんから案内を受け俺たちのポケモン、ピカチュウとリザードが戻ってくる。ん?いつのまにリザードに進化したって?オニスズメの大群狩ってたらいつのまにかね?

そーいえば、またひとつ原作ブレイクしちまったよ！それは【初代ヒロイン、カスミに会ってない】んだよ!!

カスミの出会いといえばサトシが川の中に飛び込んで釣りをしていたカスミに釣り上げられるという展開だけど今回は慌てまくってたからなあ。ひたすらに迫ってくるオニスズメをでんきショックやひのこでやっつけてたもん。その結果川に飛び込まず逃げ切ったんだけどさ?

「そーいえば、あの虹の向こうに飛んでいったポケモンなんだったんだろうな?それにカケル、なんか羽根拾ってなかったか?」

「うん。できれば忘れて欲しかった・・・」

それにくわえてホウオウイベントも発生したよ！いやー、きれいだなとおもってたそがれていたらなんか1枚の羽根がひらひらと・・・ね?

まてやごらあ！これ【虹色の羽根】じゃねーか!!!どーなってんだよ!!!俺に劇場版サトシの道歩めってか!?ホウオウと戦えってか!?畜生!!!原作ブレイクもいいところじゃねーかあ！

「博士にも連絡するけど、カケルはどうする?研究所職員として連絡したほうがいいんじゃないか?」

「かなり疲れてるみたいで疲労感すごくてさ?悪いけどもう寝かせてもらうよ。戻れ、

リザード」

リザードを自分のボールに戻すと俺はそのまま宿を取った部屋へと行きパジャマに着替えると一日の疲れを取るようにばたんとベットに倒れこむのであった。

ポケモンの世界に憧れ始めたのはいつごろだっただろうか?小学生ではないのは分かる。あの頃は純粋にポケモンがかわいいとか、バトルが一緒にしてみたいとか小学生並の感想を持ちテレビの前に釘付けになっていた。

それが中学生になると人物像にも注目し始める。このキャラかっこいいな、とかかわいい!結婚したい!とか・・・いわゆるオタ傾向が出てきたといっても過言ではないかな?

ちなみに俺がサトシ以外で一番好きなキャラを言えといわれたらなんて答えると思う?母性あふれる人妻ハナコ?母性あふれる男キャラタケシ?１０才らしからぬ母性と体つきのハルカ?・・・俺、母性に飢えてすぎじゃね?ンンッ!まあいい。俺が本当にポケモン世界、それもアニポケにきたら一度は会ってみたかった人物。それは・・・

「なんだかんだと、聞かれたら!」

「答えてあげるが世の情け!!!」
　はい、目の前で口上を述べ始めているロケット団ことムサコジニャースの３人です！いや、なんであんたらロケット団なんかやってるの?と思いながらもその３人の努力に心を打たれていた。何度もピカチュウの１０万ボルトに吹っ飛ばされるのに何度も舞い戻る姿はまるで社畜の鏡！そんなロケット団の口上を聞き終えるとなぜか無性に涙が止まらなくなってしまう。
「今まで一度も泣かなかったカケルが何で泣いてるんだよ!?なにしたんだロケット団!!!」
「ロケット団が怖かったのね?お姉さんと一緒にいましょうね?」
「許さないわ・・・。あんたら全員やっつけてやるわよ!!!」
「え?これ俺たちが悪いの?」
「私たち口上言ってただけよね?」
「にゃんか申し訳ないにゃあ・・・」
　なんかポケモンセンター内がカオスになってるんですよねえ?まず、何か爆発音が聞こえジョーイさんになにがあったかと聴きにいこうとするときまさかのカスミさん登場！なんでもカスミも今日トキワシティについたらしく寝ようとしたら爆発音に気が付き気になって向かっているらしい。そこで簡単に自己紹介をしたあと中央の待合室

に行くと天井にポッカリと穴が開かれたところからちょうど人が降りてきたのが見えたのでジョーイさんの前にかばうように出ると

「さあ、ここにあるモンスターボール!すべて我らロケット団が頂戴するわよ!」

と、登場したムサシとその隣にいるコジロウ、ニャースに俺は心臓がバックバックなりながらその姿をただ唖然としながら見つめていた。そして、口上を述べ始めると同時に涙腺ダムが崩壊してジョーイさんに思わず泣きついてしまうという状況が出来てしまったのであった。

ジョーイさんのお胸の中で泣きやみ周りを見ると気が付いたらサトシ、カスミ　ｖｓ　ムサシ、コジロウのタッグバトルが始まっていた。やはりロケット団ということもあり苦戦しているように見えたので俺もそろそろ加勢しなくてはならないかな?そう思うと涙を拭いリザードを出す。

「!カケル、もう大丈夫なのか?」

「心配かけてごめん。けどもう大丈夫だ。カスミ、悪いけどチェンジしてくれるか?」

「いいわよ!泣かされた分しっかり仕返ししなさい!!」

そういいながらカスミは俺の背中をパシっとたたく。今思ったら結構恥ずかしいことしてたな。けど、今からは本気で行かせてもらう!

「リザード、かえんほうしゃ!!」

「ピカチュウもそれにあわせて１０万ボルト!!!」
「リザアア!」「ピッカアアアアアア!」
俺は夢にまで見たロケット団との初バトルに心を躍らせながらアーボ、ドカースに技を放つ。そして威力が強かったのか２匹ともそのまま押されていき
「「熱い熱い!!しびれびれー!!!」」
と、ロケット団にも余波ダメージが・・・そして原作同様チュドーンと飛んで行き『やなかんじー!!!』と叫びながら空へと消えていく。その際に・・・
「ああ!!私の自転車がああああああああああ!!!」
まさかの余波でカスミの自転車が丸こげになってしまいましたとさ。

第４話：トキワの森は迷いの森

　トキワの森。それは、虫ポケモンたちの巣窟。ゲーム版でもキャタピーやビートルがでてきてヒトカゲやオニスズメ、つつくを覚えたニドラン♂のレベリングをした人が多いのではないだろうか。

「見たかカケル！キャタピー、ピジョンをゲットしたぜ！」

「ピ、ピカチュウ♪」「キャタ～？」「ピジョ!!」

「ご、ごめんカケル。しばらくこのままで・・・」

「兄さん。不本意だと思うけどカスミがこんな感じだからポケモンたち戻してくれないか？」

「しゃーないか。戻れピジョン、キャタピー！」

　原作通りにゲットしたポケモン、キャタピーとピジョンを出して大喜びしている兄、サトシ君に対して青い顔をしながら俺の右手に抱きついてくるカスミ。うーん、いい匂い！ではなく、なぜポケモントレーナー、特にジムリーダーのはずなのに虫タイプ嫌いなのか？もしキャタピーとかかってきたらどうするんだろうな？ちょっと試してみたい気がする。

しかし、この森はすごいな。いたるところにあの巨大なスピアーがいると思うとなんかカスミではないけどガクブルする。こんなところで野宿はやだなあと思いながら森を進むが行けども行けども出口は見つからず・・・。

あれれー?おっかしいぞ?ゲーム版だと一本道で付くはずだよね?だからまっすぐ進んでたんだけどいつの間にか迷子に・・・ちくしょう!これがアニメ版の恐ろしさってやつか!

途中、サムライ少年という辻斬りがいたのでサトシが勝負を挑んでいたけどその際にキャタピーがまさかの二段階連続進化（イエロー感）をしてしまった。

うっそだろ!まさかとは思うけどサトシのポケモンたち強くてニューゲームとかしてないよね?少し疑うよ?

サムライ少年を倒した俺たちはニビはどこにあるのか聞くとこの道をまっすぐ行けばニビに付く。ただ夜は危険だからなるべくキャンプをして朝に移動したほうがいいとのこと。もう夕方になるので近くに川が流れている場所でキャンプをはることにした。ちなみに例のマルタもあったよ!!

ちなみに川の近くにキャンプを張ったのは理由があるんだよね。それは水の確保。最低限の飲み水を確保できるから川辺って便利なんだよね。それに・・・それに!!!!カスミ様のシャワーが見れたんですよ!万歳!!

「ふー♪まさか野宿でシャワーが浴びれるなんて思わなかったわ。カケル様サマよ！」
「さすがに汗べっとりで1日終えたくないからさ。一応簡易シャワーセットを途中で買っておいたんだ。」
「俺は別に1日2日風呂入らなくても平気だけどなあ？な、ピカチュウ？」
「ピ？」
「兄さんはもう少し清潔さを求めてよ・・・ポケモンたちにはせめて行水とかさせてやろうぜ？」
　そう言いながらポケモンたち顔を向けてみる。そこにはおいしそうにポケモンフーズを食べたり寝てたりするポケモンがいた。ここでおさらいとしてみんなのポケモンを見てみよう。

サトシ
・ピカチュウ
・バタフリー
・ピジョン
カスミ
・ヒトデマン
・スターミー

・トサキント
カケル（俺）
・リザード
・ピカチュウ

やだ、俺が一番ポケモンゲットした数少ない。ちなみにピカチュウをゲット出来た理由だけどサトシのピカチュウに気が付いた野生のピカチュウが現れてリザードがなぜか燃えに燃えてバトルの末ゲットしたのだ。

いや～。リザードとかピカチュウとかテンプレ通りでつまらんとかいうやついると思うけどね？それがいいんですよ！見てよ！このピカチュウ!!かわいいでしょ！それに強い。はっはー！最高だぜピカチュウ!!

まあ、今は腹は減っては戦は出来ぬってことで俺たち人間も食事中だ。やはりキャンプといえばカレーということで色んな食材を使い料理してみたが中々うまい！

そんな和気藹々していたと気である。突如ポケモンたちに網が投げられて身動きが取れなくなっていた。

「なんなんだ！いったい!!」

「なんだかんだと聞かれたら！」

「答えてあげるが世の情け・・・」

あ、これはまたあの例の方たちですね！分かります!!けど、食事中にこられるのは少しおこなんですわ。食事中にスマホはいじらない!!!見たいな感じではないけれど団欒中に邪魔はしないでほしいんだよねえ。

「世界の破壊を防ぐため！」

「世界の平和を守るため!!」

「リザード！きりさく攻撃で網を全部切るんだ!!!」

「リッザアアアアア!!」

俺の指示通りにリザードは爪を光らせて網を糸も簡単にシュババっと切ってしまった。それを見たロケット団はというとあれえ？っという顔をしており少しだけ不憫に思えた。それに加えてピカチュウがさらに増えていたのでそれについてもなんかすげー困惑していた。

「くっ。強化した網を一撃で破るなんて・・・。けど目的はその強いピカチュウ!!我らロケット団がそのピカチュウを・・・あれ？増えてる??!!」

「本当だ！どれがジャリボーイのピカチュウか分かんないぜ？」

「だいじょうぶにゃ。あっちにいるピカチュウがジャリボーイのだにゃ！」

「了解！アーボ、ドカース。ＧＯ!!!!!」

そう言いながらムサコジはピカチュウとリザードを再び狙うために例の２匹をだし

た。どうやら俺のピカチュウには興味がないらしく俺は少しだけむすっとした。なので・・・

「ピカチュウ!でんこうせっか!!」

「ピッカア!!!」

「しゃぼ!?」「ドガー」

「俺のピカチュウだって兄さんほどじゃないけど強いんだぜ?相手してくれよ!」

そういいながらロケット団の前に立つ。すると俺を畳み掛けるようにあれやこれやを言い出した。

「ああ、ジャリブラのピカチュウだったのね?けど、あんたみたいな『泣き虫』が旅をしてるなんて驚きよね?」

「だな!ジョーイさんにも泣きついていたし正直うらやまし・・・じゃない!臆病者はとっととママの下に帰ったほうがいいんじゃないか?」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ」

などなど好き放題言ってくれちゃってもう。どうやらロケット団の中ではサトシ一人に負けている印象のようでお前の攻撃は単なるラッキーパンチだとか金魚の糞はとっとと兄離れしろとか好き放題言いやがってよ。ただ途中コジロウがうらやましいとか言ってた時は仲良くなれそう!とおもっちゃったな!まあ、それはそれ。これはこ

れと割り切ってね？やることはひとつなのですよ。
「ピカチュウ！リザード!! いくぞ！」
「甘いわね。もう終わってるわよ？ロケット団に油断は禁物ってね？」
「な!?ピカチュウ！リザード!!」
　俺は油断していた隙にいつのまにかピカチュウとリザードが倒れて先頭不能になっていた。ロケット団ってこんなに強かったのか!?いや、違う。俺が弱いんだ。油断していたんだ。サトシたちがいつも余裕で勝てるから俺でも勝てると内心バカにしていたツケが回ってしまったのだろう。
「ヒトデマン!!みずてっぽう!!・・・よし！今よサトシ!!水は電気を通しやすいのよ！」
「！そうか!!ピカチュウ、１０万ボルト!!!」
「ピッカアアアア!!!」
　ピカチュウの１０万ボルトは水で濡れた２匹にはいちげきひっさつ並みの威力で例のごとくロケット団に技と共にポケモンたちも向かっていき威力の高まった１０万ボルトが直撃。いつものごとく『やなかんじー』といいながらそらへと飛んでいき流れ星になっていく。
　そして俺は傷ついた２匹を傷薬で回復させ落ち込んでいると兄であるサトシが提案してくる。これから２人で特訓やバトルをしていかないかと。２人で強くなろうぜ？

と・・・

俺はその言葉にうなずきすぐさまバトルの準備にかかった。元々２匹しかもっていなかったのでピカチュウとリザードを使うことになりサトシはピカチュウとピジョンを使うことに決めたらしい。

１戦目：ピカチュウｖｓピジョン【敗北】

サトシはタイプ相性の悪いピジョンをぶつけてきた。イメージトレーニングということらしく次のジム。岩タイプの悪い相性にどう立ち向かえばいいか考えれるといいピジョンにしたとか。

その結果サトシはすなかけ攻撃で命中率を下げかぜおこしで遠距離攻撃をしながら体力をじわじわ削り最後はでんこうせっかでトドメという感じの結果になった。サトシいわく当たらなければどうということはないぜ！らしい。どこぞの仮面をつけた人かな？

２戦目リザードｖｓピカチュウ【敗北】

次は両者が一番使い慣れており相棒とも言えるポケモンを両方だしてきた。どちらもすばやく動けるポケモンでいくら効果がいまひとつでも多少はダメージを与えれるなら使い慣れたポケモンがいい！とサトシ言っていた。実際その通りでサトシとピカチュウのコンビはさすがで原作同様の強さを見せていた。俺はえんまくを使い命中率

を下げに行ったのにまさかの原作ブレイク発生。ＤＰで登場するはずの【カウンターシールド】生み出しやがったｗｗｗカスミも『なんなのよあれは!』とサトシに言い寄ってたしなあ。そのカウンターシールドに俺は驚いてもろにダメージを喰らいリザードは敗北。まさかの２連敗となってしまった。

夜、俺は隣で寝ているサトシやカスミの前で一人考えていた。俺はこの世界に来て何がしたかったのか?

最初は勝ち負け関係なく原作の物語を楽しめればいいと思っていた。しかし、ここまで旅をしてきたり博士にコネをつくり勉強やらバトルやらの知識を埋め込んできた結果、ポケモンたちと共に生活したり、バトルしたりするのが本当に楽しくなりこの世界にのめり込んでいた。

そのせいだろうか?この世界の主人公であるサトシに負け、ライバルのシゲルやロケット団にもバカにされ。悔しさが滲みでる。

転生者って基本主人公たちに俺ＴＵＥＥとかアドバイスする立場だろうが俺の立場は負けに負けて・・・９才という年齢だから気にするなとサトシはいうけど仮にも原作知識があり博士にも期待されているだけあって余計に惨めになる。

気が付いたら俺はサトシやカスミが寝ている中一人かばんを持ちトキワの森の闇深くへと消えていくのであった。

第５話：転生者の葛藤

「なるほどのう。それでママさんやサトシにも言わずワシの所にきたというわけじゃな？」

「・・・はい。本当に申し訳ありません。」

俺はサトシに黙ってマサラタウンに帰宅していた。色々準備してくれたハナコさんの手前上自宅に帰れずこうやってオーキド研究所にお邪魔していた。転生者ということで何があってもうまくいくという自信を見事に打ち砕かれた俺はトレーナーを、旅をやりきる自信がなくなってしまいどうすればいいのか分からなかったので博士に相談しにきていた。

博士は頬を指で掻きながらどうするかを考えているようだ。そして、何かを思いついたように指をピンと立てて俺に話をする。

「実はの？サトシやカケルが言っておった謎のポケモンについて調査を頼んでいる人がいるんじゃ。その人に弟子入りしてみんか？助手を欲しがっておったしトレーナーレベルはジムリーダー以上じゃと思うぞ？」

博士の知り合いでジムリーダー以上のレベルなトレーナー？そんな人原作にいたか

な?けど、今は藁でも掴む思いで強くなりたいのだ。ならば頼ってみるしかない。俺は是非にとお願いをして博士はすぐさま電話をしてくれるようでそのまま部屋を出て行く。

そして博士が出してくれていたお茶を飲むとすっかり冷めてしまっていたようで冷たかった。しかし、これからどうするべきか?恐らく博士が頼むはずの人物に会うとしても数日は掛かりそうだ。これ以上博士を頼るわけにもいかないし・・・怒られるの覚悟で自宅戻るかな。そう思うと荷物を集め始めると博士が戻ってきたのかドアが開かれた。だが、そこに立っていたのは博士ではなく見かけない顔のおじさんだった。

「ムッ。部屋を間違えたみたいだな。少年よ。オーキド博士を知らないか?」

「博士なら今電話しに部屋に出てます。この部屋で待っていれば来ると思うので少し待っててもらえませんか?」

博士のお客様見たいなので俺は荷物を隅に片付けると来訪者にお茶とお菓子・・・どちらかというとこの人は饅頭かな?出しておこう。しかし、この人どこかで見たような・・・確か原作アニメで出てきたよな?

「ウム、なかなかの味だ。そして少年よ。どうやら浮かぬ顔をしておるようだが何かあったか?話ぐらいは聞くことが出来るぞ?」

顔に出てたかな?この人になんか知らんけど隠し事をしてはいけない気がする。な

んていうか如何にも大人の風格というかいくつもの修羅場をくぐってきたようなオーラを放っている。うん。どうせだ、気の気晴らしにもなるしすべてぶちまけてみるか。案外他人のほうがこういうの答えやすいかもしれないし？

「茶請けのつまみになるかどうか分かりませんが俺でよかったら話しますよ。井の中の蛙が大海を知ったらどうなったかをね。」

俺は転生者ということを隠して今まで送ってきた人生を話した。そのほうが今の状況になった理由が分かりやすいしなにより全部話せという威圧がその人からあったので隠せなかったっていうのが理由だけど。

だけど、その人は俺の話すことを目をつぶりながら真剣に聞いてくれている様子だ。なので俺もこのときどう思っていたのか。また、どう動いたりしたのかを細かく説明した。

そして・・・

「ポケモンが好き、もっと一緒に旅して勝ちたいという思いは今でもあります。だけど、思いだけでも、力だけでもだめだと気が付いてしまいどうすれば自分だけの強さっていうのが手に入るのか分からなくなってしまいまして。藁にでも縋るつもりで今も博士にお願いして弟子入りをしようとしてるんです。情けないですよね・・・ホント。」

某ロボットのコーディネーターさんも言っていたけど『思いだけでも、力だけでも』と

いう名言があるがまさしくその通りだと思う。思いだけなら誰だってポケモンが好き！といえば勝てるはずだし力だけあってもそれに答えるポケモンやトレーナーがいなくては勝てるものも勝てない。

「ウム。確かに情けないな。少年よ。数度負けたくらいで努力は無駄なのだと勝手に思い込み挙句の果てには他人に尻拭い、もしくはキズを癒して貰うために一人逃げ帰ったということはな。」

その言葉に俺は苦虫を噛むように顔を歪ませ右手拳を強く握り締める。まさしくおじさんの言うとおり自分でそのカベを突破しようとせず他人に頼ればすぐに何とかなるであろうという甘い考えでいた。

俺はどこか転生者だから特別なのだ、負けても頼れば周りが助けてくれる。博士に相談したからきっと助けてくれる。ハナコさんに相談したらきっと甘やかしてくれる。そんな考えで旅に出てしまったからこの世界の住人たちに負けてしまいこうやってノコノコと帰ってきて他人任せで物語を進めようとしていたなんて本当に情けない。

そう思っているとおじさんが突如立ち上がる。

「ならばワシがその腐った根性をたたき直してやるわい！おい、オーキドよ！庭を借りるぞ！この少年の根性叩きなおしてくれるわ!!」

いつの間にかドアの前にいた博士となぜかハナコさんもいて・・・うええ!?まさか聞

かれてたのか!!!

「すまんな。そやつが弟子にするにはどんな人物か見極める必要があるといってな？ママさんも心配しておったし連絡しておいたんじゃよ。」

せやかて博士！心配するのは分かるけどハナコさんが泣く要素なんてあった!???逆に俺が申し訳ないんだけど!!!

気が付いたらハナコさんが俺に抱きついて号泣してるんですが！なんかさっきまで色々と考えてた手前辞めてほしい!!!

「では、ジンダイよ。すぐに準備するから庭に先に行っててはくれんか？カケルのポケモンたちも回復しなくては行けないしのう？」

「分かった。少年よ。準備が出来たら庭にくるがよい。ここでもまさか逃げ出すとは思わないが逃げたらトレーナーになる資格はないぞ？」

はっはっは！といいながらオーキド博士に【ジンダイ】と呼ばれた人物は部屋から出て行く。俺は泣き崩れるハナコさんの頭をなでながら頭が混乱していた。

だって　あの　バトルフロンティアの最終ボス　ジンダイ　だぜ!?

俺はハナコさんが泣き疲れたのかそのまま寝てしまったのでリビングで寝かせて着替えをしたのし庭園へとでていく。

そして、ジンダイという人物はみんなご存知であろうか？

バトルフロンティア。それは、ホウエン地方の旅を終えたサトシが次に挑戦したジムみたいなもの。そしてジンダイはその最終戦で出てきたいわばラスボスみたいなポジションなのだ。

考えてみればＸＹまで登場しなかったセレナが交流を深めているのを思い出してジンダイや他に登場するキャラが出てきてもおかしくはないと今改めて思い知った。そう、出てきてもおかしくはないのだ！

「先に使うポケモンをだしておこう。でてこいサマヨール！」

「ヨー」

ジンダイさんがもう何をだしても驚きません。たとえホウエンのポケモン出てきても無心でいましょう。そう、これがバトルに勝つために必須条件なのです。はい。けどね？

「ほっほーう。サマヨールか。たしかゴーストタイプでとくせいはプレッシャーじゃったかのう？」

何で博士がサマヨールのこと知ってるんですか！まだこの時代にはサマヨール発見

されてないですよね!?俺はあわてて図鑑を確認してサマヨールのことについて確認する。

　しかし、データなしと出て俺は思わず博士に何であのポケモンのことについて知っているのかと問い詰めてみた。

「おお。カケルのその図鑑一番古いタイプのものではないか。バージョンアップするのを忘れておったみたいじゃわい！すまんのう。」

　そういいながら新しい図鑑を俺に渡してくる。・・・つまりこういうことですね？特性が新たに追加されてサンムーン世代までポケモンたちが一気に追加されたってことです。はい。やだもーこの世界。けど、新しい技使い放題ということですね！よし!!本気でいっちゃるけんのお!!!!

　とりあえず、リザードとピカチュウの技を確認してみるとべらぼうに変更されてて驚きましたよ！けど、これでジンダイさんとのバトルも戦いやすくなったな！

「ポケモンたちのチェックは済んだか？少年よ！」

「お待たせしました！いつでも準備ＯＫです!!」

「ならば・・・こい!!」

　俺はその言葉にうなずきひとつのボール見つめて目をつぶる。するとサトシやシゲル、ロケット団といった今まで負けてきた相手が思い浮かぶが今は憎くはなくどれもい

い思い出になっていた。

「いきます！俺のポケモンは・・・こいつだ!!!」

そうやってボールを投げた転生者ことカケルは今までにない充実感でジンダイとのポケモンバトルを楽しんだそうだ。

カントー地方：キミに決めた！編
第６話：新たなる旅立ち！テンセイ山に向かって!!

　オーキド庭園でのバトルは壮絶だった。なにせレベルが違いすぎるので明らかに防戦一方だったけど兄サトシの作戦。しっぽでジャンプ！とかじめんに向かってかえんほうしゃ、カウンターシールドを駆使して何とか戦えてたけど最終的には
「カケルの手持ち２匹戦闘不能のため勝者、ジンダイ!!」
　まあ、勝てるはずありませんよね？けど、ジンダイさんとのバトルは本当に有意義だった。原点に戻り楽しんでバトルすることの大切さを知った俺はジンダイさんがバトルの途中に
「お前の戦いはどこにある!!」
　と言っていたので終わった後にまずはポケモンバトルというものを楽しむこと。それを原点にしてこれからじっくり探していこうと思うといったらにっこりと笑い頭を撫でられたのはうれしかったな。
　ただ、助手にするのにはまだまだレベルが足りん。出直して来いといわれたので俺は一人で１から修行することを近いまたいつかジンダイさんと勝負して勝つことを宣言

した。
その際に電話番号とホウオウについての情報を教えられて困ったら相談に乗るといってマサラタウンから去っていった。
そして、完全に忘れていたハナコさんを迎えに行くとなぜおお泣きしたのか教えてくれた。
何でも兄、サトシが乗ったサントアンヌ号が沈み行方不明になっているのだとか。あー。丁度あの回ですか？確か船長一人逃げ出したやつだよね？てかまともな調査もしないで花束海に投げるとかねえよ？ジョーイさんよお？
俺もサトシからいなくなったと聞き２人とも死んだのでは？と夜も眠れなかったのだとか。それは申し訳ないことをしたと思うと同時にサトシが簡単にくたばるはずがないと励まし連絡がくるまではしっかり親孝行してあげよう。そう思っただけなのに・・・
「なんで朝チュンしてんだよぉ。仮にも母親じゃねえか。」
「ンンッ～。カケルゥ♡」
同じベットで寝ていた俺たち【親子】は裸になっていた。最初はさ？食事を作ったり服とか掃除とかする簡単なことをしていたはずなんですがねえ？誕生日が丁度今日だったということでいろいろとプレゼントを貰ったんだけどまさかハナコさんに迫ら

れて断れ切れずに文字通りヤってしまうとは。ンンッ。まあヤっちまったもんはしょうがない!男なんだし我慢できなかったんだよ!!!

けど、なんか知らないけど今までで一番すこぶる調子がいいんだよね!まさかとは思うけどエ〇ゲ主人公みたいにヤッたらパワーアップとか?ははっ!そんなこと現実にあってたまるかよｗｗｗｗｗ

「リザードン!フレアドライブ!!!」

「グオオオオオオ!」

「ああ!カメックスが!!?」

ありましたよ・・・。実は今マサラタウンから御三家を貰い旅にでたトレーナーが帰ってきており博士がバトルしてみんか?と提案してきたのでジンダイ戦で進化したリザードンとピカチュウを使いバトルをしてみたけど6タテしてしまったのだ。ご都合展開バリバリ過ぎるでしょう!まさか神様、勝手に転生能力加えてたのか?

まあ、とりあえず今はサトシから連絡が来るのを待つ。それとジンダイさんがくれたホウオウの情報をまとめることだ。

とはいっても劇場版とほぼ同じらしく【テンセイ山という場所に三角岩に虹色の羽根をかざすとホウオウとバトルできる】らしい。

うーむ。テンセイ山ねえ?テンセイ　↓　転生　って変換できるけどなんか関係あ

るのかね？その辺も気になるところだし？しっかりと調べてこようかな？

そんな事を考えながらハナコさんに甘えられるというご褒美を受けながら待つこと数日。ようやくサトシから連絡が入ってきた。

「カケル！お前どこいってたんだよ!!すっげー心配したんだからな!??」

と、ハナコさんに連絡をしてきた兄サトシからお説教を食らってしまう。その際にだけどカスミにも怒られて初対面のタケシにも少しだけ説教を食らった。本当に申し訳ない。

だが、ハナコさんやセレナもサトシが行方不明なのを知っていたので俺以上の説教をサトシは受けていた。どんまい！そしてサトシ。君には黙っているけどセレナさんがなにやらたくらんでいるらしいんですよ。

いつのまにかフォッコさんを貰っていたセレナさん。肩に乗せてかわいーでしょ？と大はしゃぎしていた。くっそ！フォッコええなあ!!ください!!!（懇願）

けどフォッコ貰ったって事はセレナもトレーナーとして旅立てるのか。・・・もしかして。カントー地方にきて旅をしようとしている？ハハっそんなばかなw

ともあれ、１０才に無事になることが出来たし。兄も無事だということが分かったしホウオウと戦うためにいざ！テンセイ山へ!!!

その時にエロゲ主人公特典のせいで強くなりすぎたリザードンとピカチュウを置い

ていこうと思い新たに1匹のポケモンを捕まえた。
　運よくコンパンが現れたのですぐさま弱らせてゲットすることに成功した。コンパンといえば目がレーダーということもあり仮に迷ってもどこかに無事にたどりつけるという理由で捕まえたんだけど・・・
「このもふもふ・・・たまんねえ!まさかコンパンがこんなにかわいかったとは～♪」
「コンパッ♪」
　コンパンをゲットした俺は2匹を預けてマサラタウンから旅にでた。そのさいハナコさんからポケナビのスマホみたいなものを渡されてこってりと絞りとられた。ありがとナス!っじゃねえか・・・どうしてこうなったんだよハナコさん。まじで・・・
　ともあれ、リザードンやピカチュウがいないと正直厳しいかもしれないが今の俺はすこぶる調子がいいぜ!今の俺ならなんだって出来そうな気がする!!今ならホウオウにでも勝てそうな気がするぜ!!!そう思いながらテンセイ山向けて旅を続けてとある森に入り迷子になった時の事であった。
「ショオオオオオオオオ!!!」
「グオッ!」「クウウウウン!」「ギャオオオオ!」
「こんなの絶対おかしいよっ!!!」
　コンパンレーダーを頼りに何かが引っかかったと思ったらまさかの桃太郎とそのお

供、犬、猿、雉のような感覚でホウオウ、スイクン、ライコウ、エンテイ様たちがそこにはいたそうな。

こんなのってないよ！あんまりだよ!!いや、ね？フラグ回収っていう言葉があるのは知ってるけどね？まさか本当に現れるとは思わなかったわボケ!!!!

ほら！せっかく捕まえたコンパンも俺の腕の中でガクブル震えちゃってるし!!うちの子泣かせるなよ!!!!

けど、運よくボール投げたら捕まえれるかも・・・よし!!!いけっ！モンスターボー・・・

「ショオオオオオオ!!!」

ホウオウのせいなるほのお。モンスターボールがまるこげになってしまった。うん。無理だね！こんなのに勝てっこないわ。コンパンがまるこげにされるくらいなら・・・

たたかう

いれかえ

どうぐ

↓にげる

「にっげるんだよおおおおおおおおおおおお!!!!!」（２回目

「クウウウウン！」

カケルは逃げ出した。しかしスイクンに回り込まれて逃げられない!!!

なして!?普通逆だろ!!!!ゲームでもそうだったじゃんか!ムウマのくろいまなざし使ってやっと逃げられなくしてさ!?そこから削りに削りながらやっとゲットしたっていう思い出をなんで打ち砕くんだよ!!

俺はなにがなんだかわからずいつの間にか木の実を持ってホウオウたちをえさ付けしようとしていた。ホントなにしてんだ俺。

「クウン・・・」

「ん?たまご?」

スイクンは俺に何かを渡してきたと思ったらポケモンのたまごだった。まさかこれを俺にあずけるためにわざわざ御一行で登場したってか?

そう思っているのがわかったのか４匹のポケモンはコクリとうなずくと再びすごい雄たけびを放つと俺の前から姿を消していった。その際に・・・

「いや、２枚もいらんとですよ。ホウオウさんよ?」

またまた何故かホウオウさんが虹色の羽根を落として行き２枚の羽根をゲットしてしまった。そしてその羽根が俺の持っていたたまごに触れるとそれに反応したかのように卵がピキッとヒビが入っていく。そして

「ビぃ?ビ～♪」

「?タマゴ未発見仕事してくれませんかねえ?」

卵から孵ったのはなんとホウオウに順ずる伝説のポケモンでゲームではタマゴ未発見グループに入れられていたセレビィというポケモンだったそうな。

第７話：ジムリーダーの宿命

「モンジャラ、つるのむちですわ!!!」
「コンパン、よく見てかわすんだ!!!」
ここはタマムシシティにあるタマムシジム。桜の木が生え桜が舞い散るバトルフィールドで４つ目のバッチをかけたバトルを行っていた。
それに、タマムシジム。それだけで皆さんお分かりですね？はい！そうです！エリカ様です！エリカ様万歳!!!
・・・げふん。失礼しました。いや。けどね？興奮もしますよ。だってアニメ版の世界だからあの残念なエリカ様が来ると思っていたのにまさかの王道エリカ様!!!ひゃっふうううううう!!!
って。そうじゃねえ！今はバトルに集中だ！コンパンは得意のレーダーでつるのむちの攻撃予測をしながら右へ左へとよけていた。
そして、モンジャラが途中何かの痛みに負けたかのように顔を歪ませた後俺はコンパンに技を指示した。
「コンパン！サイケこうせんだ！」

「コンパアアアアアー!」
見事にコンパンのサイケこうせんがモンジャラに命中。最後のポケモンも倒して無事に4つ目のバッチを手に入れた。
「これが・・・レインボーバッチです。リーグ戦、がんばってくださいねッ」
そういいながら笑顔でレインボーバッチを渡す彼女は笑顔だったがどういうわけか俺はズキリと心が痛んでタマムシジムを後にした。
そして、ポケモンセンターでポケモンたちの回復を済ませると同時にハナコさんに今日もバッチを手に入れた事と伝え電話を切るとなにやらぼそぼそと話し声が聞こえたので耳を傾けてみる。
「エリカ様が4連敗したってまじかよ!」
「まじらしいぜ? つまりジムリーダー剥奪! なんでも先祖代々ジムの経営がうまくいかなくて借金してたって言う噂もあるらしいぜ?」

ジムリーダー剥奪? 4連敗? どういうことだろうか? ポケモンセンターで泊まっている時もその事が分からず翌日にジンダイさんに連絡をして確認をしてみた。すると、アニメでは知らなかったジムリーダーに関する闇の一部分が見えてしまった。
なんでもジムリーダーは4連敗するとそのジムにいられなくなりジムリーダーを剥

奪。仕事を探すのにも一苦労するとジンダイさんは言っていた。
　まさかそんなアニメのジム戦でそんな設定があったなんて。そんな事を思いながらあのときのエリカさんの笑顔を思い出していた。だからあんなにつらそうにしていたのか？いや、本当にそれだけか？それに昨日の男たちが言っていた事が思い出される。
「借金ねえ・・・」
　俺は前世のことを少しだけ思い出し、そんなはずはと思いながらもかばんを持つとどうしても気になりエリカさんがいたタマムシジムへと行く。するとそこはすでにも抜けの殻で中にあった桜並木が広がるフィールドだけが取り残されていた。
　そして他を探そうと回れ右をしようとしたときである。
「やめてください!!!!」
　室内からエリカさんの声と思う声が聞こえそれは悲鳴にも聞こえた。思わず近くにあった棒を手に取り窓ガラスを割るとそこから進入して室内を全部探し出す。
　すると丁度とある一室でエリカさんに乱暴しようとしている複数の男性人がいたのでコンパンを出すとその男たちにサイケこうせんを放ちエリカさんの前へとでる。
「おい！なにしてんだおめえら！女性に乱暴とか恥ずかしくないのかよ！」
「あっ、あなたは・・・」
「ハンッ！誰かと思ったらエリカ嬢を４連敗に導いたボウズじゃねえかよ！ありがと

な、お前のおかげでエリカ嬢を合法的に抱けるんだからよ！」

「ッッ・・・・」

その言葉にエリカさんは俯きはたけた浴衣を直そうとはせずに下を向いていた。何でもこの男たちはエリカさんのジム経営の運営を手伝ってきた人たちらしい。最初は仲良くやってきたといっていたがいつからかジムの経営がうまくいかずにエリカさんは経営を持たせるために男たちからお金を借りてしまい借用書まで書いたのだとか。

「ほら。これが今までエリカ嬢家族がジム経営で借りた借用書【３０００万】だ。ジム経営時に払えなかったら【ロケット団】に身を全て捧げる。そう書いてあるよな？そしてそれにサインしたのもエリカ嬢自信だ。」

「三千!?なぜ、ロケット団なんかに・・・まさかっ！」

「そうさ！ロケット団とタマムシジムは繋がってたんだよ！カジノを運営するという理由で代々タマムシジムに投資するっていう理由でな？」

確かに。ゲームでもロケット団が運営するカジノがありそれを見逃してジムリーダーに少しだけ疑問に思ったことがあったが・・・マジで繋がってるとは思わなかった。

「そういうことだからボウズは早く家に帰ってこの事は忘れな。お前のせいじゃない。すべてはエリカ嬢家族の問題だ。」

そういいながら力なくたっている俺の右腕を強引に引き始める。エリカさんを見る

と泣きながらこちらを見て【助けに来てくれてありがとう】と口元を動かしているように見えた。・・・くそっ！ほっとけるわけねえだろうがよ!!!!

「おい。もし、俺が１週間以内に３０００万準備出来たらエリカさんは解放してくれるのか？」

「・・・・・ほう？正義の味方が女のために金を集めるってか？しかし、お前みたいな小僧に一週間でそんな大金がたまるとは思えんが。いいだろう。面白い。正義の味方がどのように金を集めてくるのか見ものだ。」

「ア、アニキ!!いいんですかい!?」

「ああ、別にかまわないさ。どうせエリカ嬢はここから出れない箱入り娘だ。おっと、ジュンサーに言ったらエリカ嬢も捕まるからはたして通報できるかね？ハハッ！」

そういいながら男は手を振りながらジムを跡にした。まるで男たちはエリカさんが逃げないのを確信しているかのような余裕振りに苛立ちを覚える。

未だ涙が出ているのか何も動こうとはしないエリカさんに服をかけて背中をさする。

さーて、これからどうするかね？と考えていたらエリカさんに泣かれながら怒られる。

「どうして今日会ったばかりの私を助けてくださるんですの！あなたには関係のないことなのにどうして!!!」

いつの間にか俺は倒されてポトポトとエリカさんの涙が俺の顔にたれ落ちる。確かに、エリカさんからしたら関係ないことだ。他人からしたら4連敗したのもエリカさんのせいだし３０００万という借金もエリカさんの家族のせいだ。けどね？他人で助けたいと思う理由なんてひとつしかないのですよ。

「一目ぼれした・・・って理由じゃだめですかね？」

一目ぼれ。そうだ。俺はエリカさんが好きだった。アニメ版は除くがその容姿端麗な姿に子供ながらも引かれていつのまにか恋をしていた。そしてポケモン世界にきたら絶対に会いたいと思っていた一人だったのだ。

その事を伝え終わるとエリカさんは一言

「あなたって、本当におバカさんですのね？」

そう言って俺の胸の中で泣き崩れたのであった。

そして翌日。俺とエリカさんはジム内で朝食をとるとバトルフィールドにでてこれからどうするかを考えていた。1週間という短いスパンで３０００万を稼ぐこれがどんなに大変かは前世で金を稼いでいたから良く分かる。

「セレビィなんて初めてみました！すごくかわいいのですね♪」
「ビビビィ♪」
　お前もかわいいんじゃい！といえるはずもなくエリカさんはジムフィールド内を楽しそうに飛びまくっていた。そんな中エリカさんのモンジャラと俺のコンパンは友達になれたのかサクラの木の下でのんびりお昼寝をしていた。
　ちなみにセレビィだが今までバトルでは使ったことがない。生まれたばかりというのもあるし伝説のポケモンだからね？色々とありそうで使えるに使えないのですよ。あ、コンパンにはかわらずのいしを持たせてます。進化？させねえよ！
「改めて本当にごめんなさい。アナタまでこんな事に巻き込んでしまい。」
「いいんですよエリカさん！好きな人の前ではかっこいいとこ見せたいもんなんですよ♪」
　その言葉に顔を真っ赤にして俯くエリカさんめちゃかわ！（２回目）けど３０００万かあ？俺の転生能力【一般人以上の金運】でどこまで稼げるのか・・・けどやるしかないよな！
「ビイ！」
「うおっと。セレビィあまりはしゃぐなよ？お前は卵から生まれてまもないんだから。」
　・・・ん？卵？俺はその言葉に疑問を持つとセレビィの図鑑説明を見るために図鑑を

向ける。すると図鑑説明の一部に面白い説明が書かれていた。

セレビィ　ときわたりポケモン

時を　越え　未来から　やってきた　ポケモン。セレビィが　姿を　現す　限り明るい　未来が　待っていると　考えられている。

これだあああああ!!!!明るい未来が待っている。つまり幸運が訪れるということか?よし!!!これならワンチャンいけるで!!!

俺はエリカさんにお留守番+コンパンの面倒を見てもらうのをお願いしてジムをあとにした。そして草むらに出向くとあるポケモンをゲットするために右往左往した。そのポケモンとは

「あら?イーブイですのね?タマムシ近辺に生息するとはきいてましたがイーブイを2匹ゲットするなんて幸運ですのね?」

「ブイ?」「ブイ!」

そう、俺はイーブイをゲットしたのである。本当はニャース2匹でも良かったのだがセレビィの効果が働いたのか2匹現れて幸運にもあの技を覚えていてくれた。それは・・・

「イーブイたちよ!そのままねこにこばんを続けるのだ!!!」

「「ぶーい!!!」」

「イーブイがかわいいからゲットするという人は聞きますがこれではまるで・・・」
エリカさんドン引きしないで！これはアナタのためでもあるんだから!!!けど本当にイーブイをこのような金のためだけに捕まえるなんて思ってもなかったよ!!!しかも２匹も!!!!!
っと。とりあえずイーブイたちが出したお金で宝くじも買っておこうか。あとロケット団スロットコーナーにも行ってセレビィのご加護でお金をたくさんゲットだぜ!!!!ふへへ、たまりませんなあ!!!けどなあ、仮にもロケット団だし金を集めただけで諦めてくれるのかね？下手したら脅してくるかも。・・・しゃーないか。
俺はエリカさんにばれないようにとある人たちに電話をかけ現在の状況を説明し終えると再びイーブイたちとともに猫に小判をする日々を送った。
そして、一週間後・・・
「おい小僧・・・これ、どうやって手に入れたんだ？」
「ねこにこばん　と　宝くじ　と　あんたらのスロットで」
はい。きっちり耳そろえて３０００万そろえてやりましたよ!!!ふふっこれにはロケット団の連中も驚いているぜ。けど途中からひそひそと声を話し始めた。そして案の定エリカさんを脅しにかかった。
だが残念だな！それはすでに対策済みですよ！

「ロケット団！ジムリーダー脅迫罪の罪で逮捕する!!」
はい。ジュンサーさんにおもっきり連絡してやりましたよ！ただ、説明するのもあれだったので色々とでまかせはいったけどね？
先祖代々エリカさんジムリーダーは脅されて無理やり借用書を書かされたってね。ロケット団はこれは合法だとかいってたけど悪の組織が合法とか言っちゃあ終わりですよ！
まあ、そのあと色々と取調べを受けたんだけど無事に開放された。しかし・・・
「申し訳ない。ジムリーダーのほうまではどうにも出来ませんでした。」
「いいのです。負けたのは私の実力不足なのですから・・・」
そう。ジムリーダーエリカは結局のところ４連敗したということは覆す事が出来ずに剥奪。タマムシジムは閉鎖ということになってしまったのだがどこかすがすがしい顔でその光景を見ていた。
「ロケット団に屈することなく今度は自分の力でジムを建て直して見せます。そのために・・・あの・・・」
そういいながらもじもじして顔を赤くするエリカ様かわいい（天丼）
けど、かわいいものはしょうがないんじゃい!!
「私を旅に一緒に連れてってくれませんか!?」

そういいながら瞳をウルウルさせ俺を見つめてくる。え、まじで？こんなことあっていいの？夢の旅路だよ?!断る理由がないよね！

「こんな俺でよかったら。エスコートさせてください。お嬢様」

そういい手をとって俺たちは笑いあった。その後、ハナコさんに使用することのなくなった３０００万を送金したのとエリカさんのことを紹介するとめっちゃくちゃ怒られた。

なして？

第8話：カケルの戦い

「お義母さま。お久しぶりです！」
「あら～。エリカちゃん！カケルの面倒いつも見てくれてありがとうね？」
「いえいえ。一緒に旅をしているだけですから。むしろこちらが助けられてるばかりで・・・」
　どうして女性の電話ってこんなに長いのだろう？こんな会話をしてすでに1時間経過してますぜ？ほとんどが俺の話で聞いてて恥ずかしくなるからこうやってポケモンセンターの一角でポケモンたちにポケモンフーズあげてるんだけどさ？てかいつのまにハナコさんと仲良くなったのさ？てか、お義母さまってなんぞ？
　そんな事を思いながら
「コンパ♪」「ビー！」「ブラッ？」
「モジャ～」「フィー」
　エリカさんこと改めエリカのポケモンたちも飽きれたようにご主人をみながら俺のポケモンたちとともにご飯を食べていた。ちなみにイーブイだけど1匹はエリカにあげた。なんかね？リーフの石使ったらイーブイワンチャン進化するんじゃね？と思い

タマムシデパートで石買って使ってみたらリーフィアに進化したのよ。それを見たエリカがリーフィアのことを気に入ったらしく草タイプのジムリーダーということもありリーフィアを譲った。

俺のイーブイはというとブラッキーに進化した。てっきりなついてくれてなかったと思ってたのに夜にバトルしてたら進化したのよ。うれしいよね！

さて、ここからどの道へ進もうか？テンセイ山の最短の道のりだとジムもすくないし・・・少し遠回りになるけど別ルートで行くか。そう決めて自分のポケモンを戻してエリカさんのポケモンたちもボールに戻そうとしたときシャワーズを連れたトレーナーが入ってきてジョーイさんに見せていた。

「エンテイが近くの森に出たんだ。相性のいいシャワーズで挑んだんだけど負けて。」

エンテイだって!?そんな声があちらこちらから聞こえてくるのが分かった。しかし俺は興味が全く・・・いや興味はあるけど今はまだ戦うときではない。一度ホウオウと３犬を目の前にしている。だからそれが分かる。

ならば今することはなにか？決まっている。ジンダイさんが言っていた自分が戦う理由を見つけることだ。ただ漠然と転生者として生きてたらきっとモブのまま終わってしまいそうだからな。そのあたりはちゃんとしなくては。

いつの間にかポケモンセンターはもぬけの殻になっており残されたのは俺とエリカ、

そしてジョーイさんだけとなっていた。電話が終わったエリカが戻ってきたので旅に出る準備を始める。そういえば、ハナコさんといつ仲良くなったの？すっごい気になるんですけど？

「ふふっ。秘密ですわ♪」

だとさ！逆に怖くなるよね！けどかわいいからいいや!!けどま、エリカがうれしそうならいいかな？そう考えているとなにやらうるさい連中が入ってくる。お姉さんのほかにも少女やロリといったいわゆるハーレムでその中をよく見ると顔なじみのやつでエリカも少し顔をしかめていた。エリカもあいつのこと知っているのか？

「・・・ええ。人やポケモンを道具としか見てないような人でしたのでよく覚えていますわ。」

原作キャラではそんなキャラではなかったのにな。なにがあったシゲルよ？けど今のあいつは俺も嫌いだしなにより原作にはないサトシを確実に嫌っているという行為が本当に嫌だ。

なのでカバンを持ちポケモンセンターから出ようとすると案の定シゲルに声をかけられてしまう。はあ・・・憂鬱だなあ。もう。

「よお！誰かと思えば落ちこぼれの弟君じゃないか！そういえば１０才になったんだってな。じいちゃんから聞いたぜ？」

「そいつはどーも。で、そのお姉さんや少女ロリっこはどうしたんだ？ついに犯罪でも犯したか？」
「んなこたーしてねえよ。っと、タマムシジムのジムリーダー様じゃねえか。どうした？俺と一緒に来たくなったか？」
「結構です！今はカケルさんと旅をしているので!!」
　そういいながら俺の右手にしがみついてくる。エリカ。少し手が震えているようなので手を握り安心させてやる。まだ少し男に対する恐怖心は残ってしまっているようだ。
「そうだ。お前の誕生日プレゼントだ。いい情報教えてやるよ。ここから少し南にいったところにポケモンいたぜ？弱いポケモンだから弱い『奴等』にはお似合いかもな。バイビーバイビー！」
　いつものように手を振りながら去っていく。そして女性人も原作通り『いいぞ、いいぞ、シ！ゲ！ル！』といいながら後をついていく。あんなやつらのどこがいいのか。本当に分からない。
　けど、シゲルの言っていた弱いポケモンね？次の目的地に行くには通る道だから様子だけ見に行ってみるか。なんか嫌な予感がするし。そしていつものようにエリカが『頭をなでてほしい』といってきたので抱き寄せながら頭をなでているとジョーイさんが

やってきて
「イチャイチャするなら人前でしないでもらえますか？」
と若干怒りながら追い出されてしまった。解せぬ。
そしてカケルは気が付かなかった。シゲルのカバンに黒く淀んでいる羽根がくっついているということに。

さて、シゲルが言っていた場所へと来てみたがそこは洞窟だった。ちょうど雨も降って着たので雨宿りも含めて焚き火をしながら服を乾かしながら散策してみる。しかし、どうやらデマ情報だったらしくポケモン一匹いなかった。博士に今度文句言ってもらわないといけないかな？さすがに暴走しすぎだろ畜生！
「ごめんな？エリカにはあんまり野宿とかさせたくなかったけど状況が状況だから・・・」
「別にかまいませんわ。それに野宿は旅の風情でもありますしこうしていればどこでも泊まれます♪」
焚き火の前で肩を寄せ合いイチャイチャする２人。例の如くポケモンたちはまたか

あ・・・とジト目で見ながらお互いに体を寄せ合い寒さを凌いでいた。そんな時セレビィが何かを見つけたのか出口のほうへ向かっていく。
「ビィ!!!」「グオ♪」
「まあ、エンテイではないですか。それに野生のポケモンたちですわね?」
のっそのっそと歩いてきたのは以前あった3犬の1匹なのだろうか?セレビィが喜んでエンテイの元へ行きその回りをクルクルと回っていた。
エンテイも嬉しそうにポケモンたちを奥に連れて行くとセレビィと共になにかおしゃべりをしているようだった。卵の時のことでもみんな覚えているもんなのかね?
俺も久々に見るエンテイに近づいていくが野生のポケモンたちが完全に威嚇してしまうので秘儀、餌付けをして仲良くすることに成功した。ちょろいぜ!
「ゼ、ゼニイイイイ!」
野生のポケモンの中に珍しいポケモンがいた。ゼニガメである。ゼニガメは何故か俺に気が付くとひざのうえに乗り泣き出してしまっていた。その行動に俺やエリカは驚いていたがエンテイはどこか寂しそうにゼニガメを見つめている。
「あら?そのゼニガメさん。お知り合いですの?」
「いや、野性のポケモンのゼニガメは知らない。せいぜい知っているのはオーキド研究所で世話してたときのゼニガメ・・・」

そう。オーキド研究所。俺がゼニガメをよく見たのはその時だけである。そして、先ほどシゲルの言っていた言葉を完全に思い出す。

『弱いポケモンだから弱い『奴等』にはお似合いかもな。』

そして、それは確信へと変わりゼニガメへと声をかける。

「お前・・・シゲルのゼニガメか？」

その言葉にうなずくと俺は生まれて初めて人を殺したい。そう思ってしまったのであった。

ゼニガメは泣きつかれたのか。俺の隣でぐっすりと眠り、またエリカも俺のひざに頭を乗せて寝息を立てている。

エンテイたちはというと雨が上がったからなのかのっそのっそと歩いて洞窟の外へと歩いていく。その際にセレビィとゼニガメのことを頼んだと言わんばかりに見つめられたのでうなずくとそのまま去っていく。

しかし、世の中本当にポケモンを捨てるやつなんているのか。そんなこと、あってはならない。人もポケモンも同じ生命宿しているのだ。許されるはずがない。

『お前の戦いはどこにある!!』

ジンダイさんの言葉がふと頭をよぎる。ゼニガメを見ながら、そして捨てたトレーナーを思い出しながら俺の戦いを見出していた。

「ゼニ～・・・」

「お。起きたか?ゼニガメ。」

気が付くとすでに朝だったらしく洞窟の出入り口から日がさしていた。ゼニガメはというとエンテイたちがいなくなっているのに気が付きあわててそれを追いかけようとしていたが呼び止める。

「ゼニガメ。俺といっしょにこないか?シゲルがいってたんだ。俺とお前は弱いもの同士でお似合いだって。だから、一緒に強くならないか?」

そうやってボールをひとつとりだす。ゼニガメもしばらく考えていたが答えが出たかのようにうなずくと俺は立ち上がりモンスターボールを投げた。

「ゼニガ!」

ゼニガメはボールに吸い込まれていくと揺れることなくゼニガメをゲットすることに成功した。

そしてゼニガメの入ったボールをおでこに当てて誓いを立てた。

(ポケモンを捨てたトレーナーなんかには絶対に負けない。そして、捨てられたポケモ

ンと共に強くなる！）

その言葉を心に刻むと出発するかと思い荷物をまとめに入ったが

「ひどいですわ・・・」

エリカをひざに乗せていたことを忘れており頭を打ったのかこすりながら涙目ですねているエリカの機嫌をとるまで何時間もかかってしまった。エリカ、本当にごめんなさい！